



## 登校拒否女子中学生の心理治療過程でみられた象徴表現について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 信介 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/713">http://hdl.handle.net/10258/713</a>

# 登校拒否女子中学生の心理治療過程で みられた象徴表現について

清水 信介

On the Symbolic Expressions in the Process of  
Psychotherapy with the School Refusal Case of  
a Junior High School Girl

Nobusuke Shimizu

## Abstract

In this paper, the author reports the psychotherapeutic process of a school refusal case and tries to examine the symbolic expressions that appeared in the process of therapy.

The client is a girl who was 12, at the first grade in a junior high school when I first met her. She was treated with the nonverbal psychotherapeutic approach for 18 months. This approach consisted of sand play, Landscape montage technique, Baum-test, drawing, mutual scribble and clay modelling.

In the course of therapy, she showed several significant symbolic expressions, especially in drawing. For example, an "enantiodromia" as C. G. Jung put it was represented in drawing at the 9th session. After that, the "death and rebirth" symbol of transformation appeared. And furthermore, the "Mandala" symbol was expressed in the 15th session. Meanwhile, she gradually developed a therapeutic regression and became able to express "Amae" to her parents. She began to go to school four months after the onset of the therapy, and continued to strengthen her ego.

## I はじめに

心理療法は一定の特質を備えた治療的人間関係を基盤にして治療者とクライアントが心的エネルギーを交流し合うことによって行われる。治療者の最大の任務は、クライアントに心を深く関与させその心の語りかけに耳を傾けながら、クライアント自らの動き、歩みを尊重してこれと行を共にしていくことにある。そこでは、一人一人のクライアントとの間で生じる一回限りの出会いのプロセスを〈工夫し創造する心〉と〈内的成熟の時が訪れるまで待つ姿勢〉が常に必要とされる。そうした治療者とのかかわり、治療的守りを経験する中で、クライアントは自己表現の通路を見出し、心の奥底に秘めている可能性を展開させて成長し、問題状況から立ち直っていくのである。

ここに取り上げるのは登校拒否の女子中学生の心理治療例である。本例は非常に自発性に乏しく言語的表現も極めて少ないという状態にあったので、治療者は治療開始当初彼女との交流の通路を見出すための模索と工夫をすることを格別に求められた。結局、技法的には、課題画、自由画、箱庭、相互スクリブルなどの非言語的技法を用いて多面的にイメージ表現を促進していく接近法<sup>5)8)</sup>をとるかたちに落ち着いていった。治療過程において、本例は類似の表現を紋切型に繰り返すことが多かったが、それでも微細な部分において少しずつ内界の変化の動きを表わしながら、また治療の重要な転回点においては意味深い象徴的イメージ表現をも示して、静態的でゆっくりとした歩みではあったが、着実に心の変容、成長を遂げていった。以下では、その治療経過を報告し、そこにおいて示された象徴表現について考察する。

## II 事例概要

〔クライアント〕 静枝（仮名） 12才 中学1年生（初回面接時）

〔主 訴〕 登校拒否

〔家族構成〕 父親40才、母親38才、弟8才（小学2年生）と静枝との4人家族。父親は某病院の事務職員をしている。彼は8人きょうだいの末子とし

て生まれたが、乳児期に父を病気で失っている。彼は神経質、小心な性格で、家庭の外では自己主張をしたり攻撃性を表現したりすることができない。人づき合いがうまくいかないという感じを強く抱いており、交友関係も狭い。また、体面を非常に気にするところがあり、仕事上困っていることがあっても上司や同僚に実情を明さない。そのために、過去に仕事上のことで行き詰り抑うつ状態に陥り長期欠勤をしたこともある。他方、家庭においてはかなり我儘な方で、家での男仕事のことも一切しない。母親は専業主婦である。彼女は4人きょうだいの一番上として育った。父親とは対照的に精力的な感じもする女性であるが、感情の細やかさにやや欠けるという印象を受ける。彼女は夫に対して自由に物が言えないところがあると語っているが、逆にある面では彼が妻に強く依存しているところも認められる。静枝の弟は社交的でなかなか活発な男の子である。

〔生育歴〕 静枝は妊娠7カ月で仮死状態で生まれ、2カ月半ほど保護器の中で養育された。人工栄養で育ったが、あまりミルクを飲まなかった。しかし、発育は順調であった。発語、歩行開始の時期は普通で、排泄訓練も順調であったという。

父親は静枝が小さい頃から躰に非常に厳しく、「あれしたら駄目、これしでは駄目」と抑えることが多く、また感情的に叱りがちであった。母親も同様に静枝の行動に制限を加える傾向があった。そういうことから、彼女は親に逆らうことがない物分かりの良い子であったが、4才頃からはいつもおどおどしていて親や大人の顔色を窺う傾向が目立ってきたという。余所の子と一緒に遊んでいても、自分の考えを言えずに相手の言いなりになっていることが多かった。また、静枝は幼時より父母に甘えることがあまりなかった。

小学校1年生の頃は特に問題なく学校にも嫌がらずに通っていたが、担任教師からの評は「勉強が分からないというのではないようだが、内気で発表が少ない。決められたことはきちんと守る」というものであった。2年生の二期頃頃から、時々腹痛や発熱で学校を休むようになる。そして、3年生に進級する際にクラス替えがあり、新しいクラスには知っている仲間がいなく

なり静枝は悄気ていた。新学期の始め1週間位は登校していたが、その後は登校しようとする、嘔吐、腹痛が生じ休みがちとなる。4年生以降も同様の状態で休むことが多かったが、進級が許可されない程度までには至らなかった。静枝は、小学校低学年から常に友達ができないとって悩んでいた。

中学校に入ると、始めからポツリポツリ休んでいたが、5月の連休を過ぎた頃から休む日が増えていった。父親は静枝を登校させようとして厳しく叱り叩いたりもしたが、彼女は登校しなかった。学校を休む時は、朝腹痛を訴えてベッドから離れない。しかし、昼頃になると起きてき、午後には元気になって本やテレビを見て過ごす。10月中旬からは全く登校なくなり、12月中旬になり母親から筆者に相談申し込みがある。母親とのインテーク面接を行った数日後、静枝が来談するはこびとなる。

〔治療期間〕 昭和×年12月中旬から昭和×+2年6月上旬までの約1年6カ月間、57回の治療面接を行った。これと併行して、やはり筆者が母親面接22回、父親面接1回、父母同席面接2回を行っている。なお、静枝は治療開始から4カ月後の2年生の新学期から登校を始めている。

### Ⅲ 治療過程

以下では、クライアントとの面接を中心にして治療経過を4期に分けて報告する。

#### 第1期 (第1回面接～第7回面接 約1カ月半)

治療への導入から一応の安定した治療関係が成立するまでの時期である。

第1回面接に静枝は母親と一緒に来談する。背丈は中学1年生としてそれほど低くはないが、かなりの痩身に弱々しい印象を受ける。治療者が「今日は静枝さんと2人だけでお話したいのだけど、どうかしら？」と彼女に話しかけると、うなづく。母親が退室後、2人で話すことになったが、静枝は伏目がちで自発的に語ることが全くない。彼女が好きなことなどについて問うと、少しだけ口を開くが、あとはうなづくだけか小首をかしげて黙っていることが多い。箱庭に誘うと、視線は棚の人形などを追っており上体が前に傾

いて関心があることは窺えるが、足が前に出ない。しばらく待ってみるが、動けないので「無理しなくていいですよ。またやってみたい時にしましょう」と語りかけて打ち切る。そのまま、2人で並んで棚の人形を眺めながら、彼

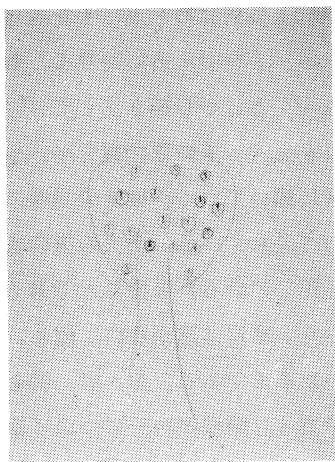


図-1 バウムテスト

女が普段している遊びなどについて聞く。その後、バウム・テストに導入すると、予想外にスムーズに応じる。樹木画は、《風船型の樹冠の中に開放幹が突き出ている。その幹には、縦に3、4本薄い筋がひかれている。包冠線の内側は枝の分岐がないが、りんごの実が宙に浮いたように描かれている。地面線は描かれておらず、不安定な印象を受ける》ものであった(図-1)。絵からは、自己存在の基本的なものへのこだわりがあり自信に欠けること、精神面での成長の停滞、社会性の形成が不十分で他者とのコミュニケーション

ンがとれないこと、短兵急に成果を求めるような傾向などが窺われた。

第2回面接には静枝ひとりで来談する。表情が明るかったので箱庭に誘ってみると、うなづくが、やはり棚の人形を見回わしているだけで動けない。この後に提案したスクリブルにも反応せず、話しかけてもほとんど応答がない。そこで、治療者は無理に会話しようとせず静枝と共にいること自体を大切にしようと思って接した。この回までの静枝との接触経験から、治療者は彼女にとってリードされたり構造を与えられたりする事態の方が振舞いやすいものと判断した。そこで、当面はある程度構造を与えて、徐々にそれをはずしていくようなアプローチをとっていかうと考えた。

この回の直後の面接で、母親は静枝が第2回面接の当日約束の時刻が近づくと自分で身支度をして面接に出かけたので意外であったと語る。治療者は

彼女が面接に何らかの意味を感じてくれているように思い少し安心した。また、静枝は家庭でも路線を決められないと動けない傾向が強いという。

第3回面接では、前回面接後に立てた方針にもとづいて課題画である〈風景構成法〉を施行した。まず、「川」を描くように指示すると、彼女はそれを画用紙のどこに描こうかと迷っている。用紙上の空間の一点に手をもっていくが、ペンを紙の上に下ろすことをためらい、手を引っ込めたりまたもっていったりすることを繰り返す。治療者は「うん、どこから描き出していいか迷うね」と語りかけ、ドキドキしながらこれを見守っていた。数分後、やっと「川」を描く。その後は、比較的スムーズに描いていく。彼女の説明によると、《夏の午後2時頃で晴天。川は左の方へ流れている。大人の男の人が田んぼの世話をしている。動物は兎で食物を探している》とのことである（図一2）。人は記号的線描画で表わされており、家には窓がない。樹木はbaumテストの場合と同様に幹の上の方が開いたままである。しかも、幹も緑色に塗られていて草のように弱々しい印象である。静枝が自分について懷疑的で不安が強く、外界と受動的消極的にしかかわりをもたないこと、対人関係を避けようとする傾向などが窺われた。彼女の日常生活での大変さが一人強く感じられた。また、餌を探している兎からは、彼女の精神エネルギーの水準の低さや周囲に対して過敏な彼女のあり方と共に内在する甘え願望の強さが推測された。今回、静枝は自発的に話すことはないものの、治療者の話しかけに対してはほとんど応える。

第4回面接では〈統合的HTP〉を試みた。課題画は静枝には適応しやすいようで、ためらいなく「家・木・人」を描くが、風景構成法と同様に家には窓がなく人も記号的線描画であった。樹木は風景構成法におけるそれと全く同じであったが、冠部が緑色、幹は茶色に塗られている。この後、枠づけをしてスクリブルを試みるが、静枝は描線を自由に走らせることができず、かろうじて右下隅に線を一本ひいて枠とつなげて三角形をつくる。さらに、他の場所にも枠から半円形を1つ描く。しかし、彼女はそれに何かを投影することができなかった。それは、まさに与えられた枠組にもとづいてしか行

動できない彼女の不自由なあり方を端的に示しているように思われた。

母親の話によると、正月に家族で親戚宅へ遊びに行ったが、静枝は殻に閉じこもった感じで全く喋らない。自宅でも彼女は何かを言いかけては途中で止めたり語尾を濁らせたりする。母親が聞き返しても「いい、……」と言って止めてしまうという。治療者はこれまでの接触から得ている印象として「静枝ちゃんは今外の世界に対してとても不安が強く、自分に自信がもてないようで、おずおずと振舞っているように思う」と伝える。母親はそれに同意し、静枝は小さい頃からおどおどしていてそれがずっと残っていると語る。治療者は、静枝にとって必要なのは安心できる関係であることを説明し、彼女が話してくることに関心をもって耳を傾けること、彼女のペースを大事にして待つことが大切であることを強調して伝える。

第5回面接。静枝が前回のスクリブルについて何を求められているのかわからなかったと母親に語ったと聞いたので、治療者がさり気なくそのことに触れると、彼女はうなづく。そこで、再度教示を与え、治療者が「魚」を投影してみせ、その後で誘うと応ずる。彼女はかなり長い間ためらった後に描線をひき、その一部分に「トンネル」を投影し好きな水色で彩色する。この後、オセロゲームを2回戦やり、勝負は1勝1敗であった。退室する際、初めて彼女の方から先に「さようなら」を言うてくる。

第6回面接には微笑を浮かべて入室。〈風景構成法〉を指示すると、あまり躊躇なく描く(図-3)。今回の絵では、家に窓がつき外界との交流の通路が少し広がった印象である。いまだ記号的線描画ではあるが、人(男の子)の顔に肌色が塗られている。また、幹も樹冠部も茶色に塗られた枯れたような木も注目される。この後、〈相互スクリブル〉を試みると、静枝は「三日月」を投影する。治療者は「鼻の大きなおじさんの顔」を投影した。

母親の報告によると、三学期が始まって担任教師から電話があり今学期出ないと進級させないと言われたという。静枝は登校の気配を見せないが、面接へは喜こんで出かける。学校へ行くのは嫌なのに面接には明るい顔で出かけて行くので、父親が不思議がっている由。



第7回面接になると、だんだん緊張がとれてきていることが明確に感じとれた。〈箱庭〉に誘うと、ためらいなく作り始める。中央より少し右寄りの領域の砂をかいて池を掘り、周りに4本の木を植える。池の中に4羽の白い水鳥を置く。池の左側に少女とステッキをもつ男が立つ。静枝は《鳥に餌をやっている》と説明する(図-4)。少女と男は親子ではないという。この時

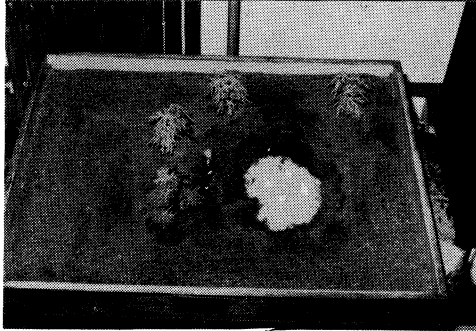


図-4 鳥に餌をやっている

点での治療者との関係性を表現した作品であるように思われた。

〈相互スクリブル〉では、静枝が「鳥の尻尾」、治療者は「消防士」であった。前回の「三日月」と同様に全体像ではなく尻尾だけであるが、彼女が自分の姿をちょっとだけ見せてくれたように治療者は思った。

母親の報告では、静枝は最近親の顔色を窺うようなことが少なくなってきたという。

## 第2期 (第8回面接～第23回面接 約2カ月間)

この時期に入ると、静枝は徐々に治療的退行を示し、父母に甘えるようになり、そうした体験を基盤にして元気になっていき、2年生の新学期から登校を始める。

第8回面接に来談した時、静枝は明るい表情で箱庭や描画においてもためらいを見せない。

〈箱庭〉は、《小学4年生位の男の子、女の子と幼稚園女児の3人が公園で遊んでいる》との

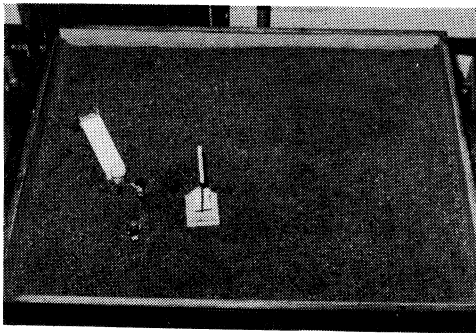


図-5 公園で遊んでいる

説明である(図-5)。砂箱の左下隅領域しか使用されておらず、彼女の受動

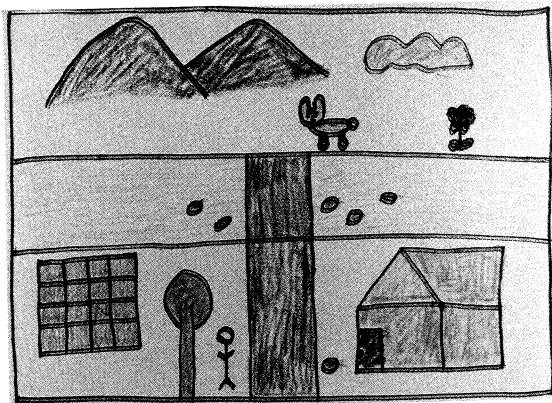


図-2  
風景構成法(1)

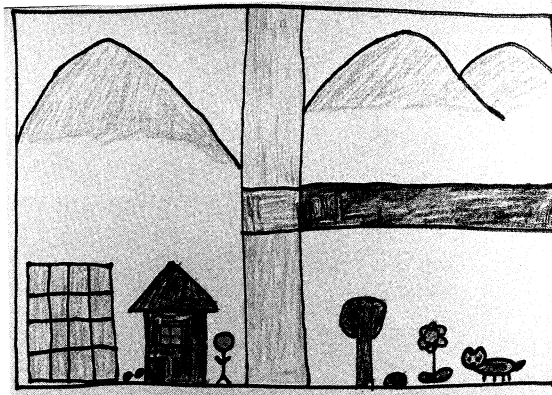


図-3  
風景構成法(2)



図-7  
樹冠と幹の色の逆転

図-9

樹冠が黒い木



図-10

肉体をもった少女の出現

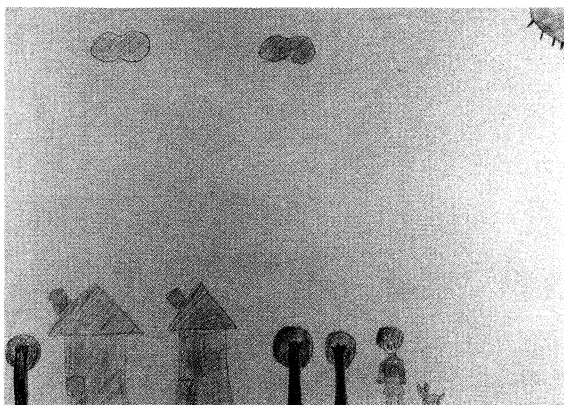
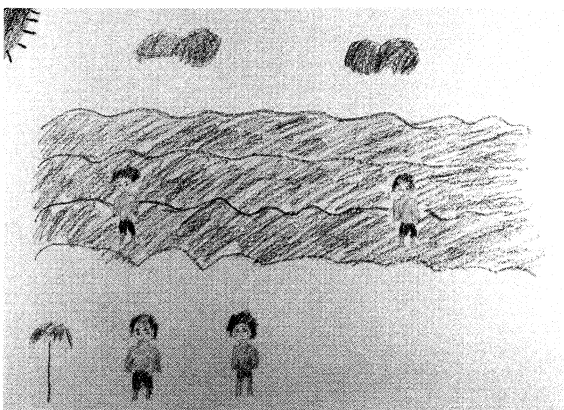


図-12

海水浴



的、退避的なあり方がそこにも表わされている。この後、画用紙に枠づけして〈自由画〉を指示すると、「花瓶にさされた5本のコスモス」を描く。

母親の報告によると、静枝はこの頃母親と話をすることが増えてきたという。

第9回面接の〈箱庭〉においても、やはり左辺寄りの領域に「牧場」を作る(図-6)。

雌牛と3匹の仔牛があり、その側で男性が作業をしている。家畜の養育という母性を象徴するテーマが出現し、内的エネルギーが蓄積、強化されつつあることが窺える。枠なしで〈自由画〉を指示すると、「家・木・雲・太陽」を描く(図-7)。

今回の樹木は開放幹ではなく、わずかであるが枝の分岐が見ら

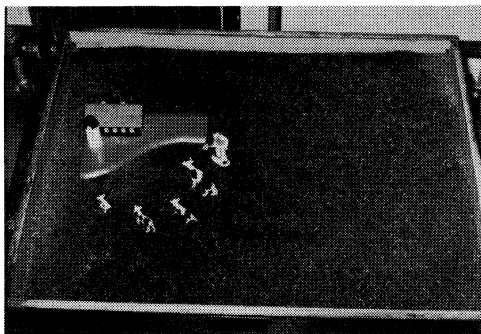


図-6 牧場

れるが、冠部が茶色で幹が緑色というように色が反転している点が特に注目された。また、右上隅に描かれた4分の1の太陽も印象的であった。〈相互スクリブル〉で、静枝は初めて全体像で「魚」を投影するが、その魚には口がない。治療者は「象」を投影した。

第10回面接では、まず〈箱庭〉で「3才位の女兒2人がジュースとパンを食べている」を作る。人物の年齢が下がり口愛的なテーマが出現し、治療的退行が進展しつつあることが

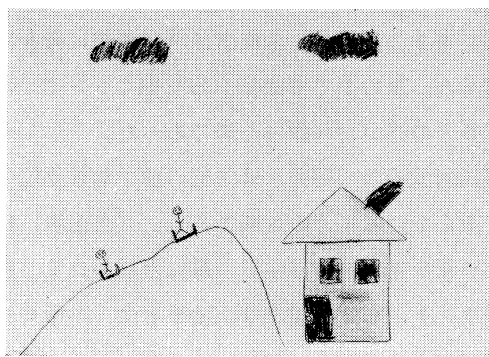


図-8 そり遊びをしている兄弟

推測された。〈自由画〉は「そり遊びをしている兄弟」(図-8)であった。

人物は相変わらず記号的線描画であるが、初めて目鼻が描かれる。〈相互スクリブル〉では、第1回目静枝が「リボン」を投影し、治療者は「ジャンボ機」であった。第2回目は、彼女が「落とし穴」、治療者は「はねる鯉」であった。この回、治療者は次回から面接を週2回の頻度で行うことを提案し、静枝もそれを了承する。これは、父母の焦り、不安が強くそれをもう少し受けあげようという意図と静枝が少しずつ変化してきていることとの兼ね合いでの提案であった。

第11回面接の〈箱庭〉でも左辺寄りの領域に「家の前で遊んでいる3才位の女兒、ミッキーマウスと犬」を作る。〈自由画〉では、「2つの山・2軒の家・2本の木」を描く（図-9）。樹木の冠部が真黒く塗られているのが衝撃的であった。治療者はこれをイメージの世界における象徴的な死の体験が植物的な段階で表現されたものと受けとった。

第12回面接では、まず〈箱庭〉において「犬と遊んでいる2人の小学1年生位の女兒」を作る。そして、この回描いた〈自由画〉には、初めて肉体をもった少女像（小学5年生）が登場する（図-10）。また、樹木の分枝がより明確となり、外界への働きかけの動きがいくぶん出てきたことが窺われる。樹冠部は緑色に戻っているが、幹が黒であり前回のイメージを引き継いでいる印象である。この回、〈相互粘土法〉を導入すると、静枝は「にぎり鮎とお茶」を2人分作る。治療者は「足の間に卵をはさんで暖めているペンギン」であった。氷の上で辛抱強く卵を抱くペンギンのように辛抱強くつき合っていこうとの思いから作ったのであった。

第13回面接の〈箱庭〉は《家の前で幼稚園位の2人の姉妹がシーソーに乗って遊んでいる》との説明である。〈自由画〉には2本の木と2つの雲を背景に小学6年生位の双生児の姉妹が描かれる。〈相互粘土法〉では、静枝が「お子様ランチ」を2人前作り、治療者は「小学6年生位の少年」を作った。

第14回面接には、〈箱庭〉で「家の前で遊んでいる小学1年生と2年生の姉妹」を作る。砂箱の左下隅に池が掘られ、そこに2羽の白いアヒルがいる。〈自由画〉は「ゴム跳びをしている小学6年生位の少女3人」。それ以前の

描画では、画用紙の下端から描かれていたために分からなかったのだが、人物像の足の部分がないことが今回明らかになる。「足」が欠如した人間像は第36回面接まで繰り返し登場する。

第15回面接の〈箱庭〉では「動物園」を作る(図-11)。使用領域は左辺から3分の2位のところまで広がり、これまでの最大となる。親象2頭、子象1頭とキリンが2頭おり、ミッキーマウスと4人の人(女性)がそれらを見ている。自分の中の衝動層のものに触れるイメージであろう。ミッキーマウスがガイドしているような印象である。

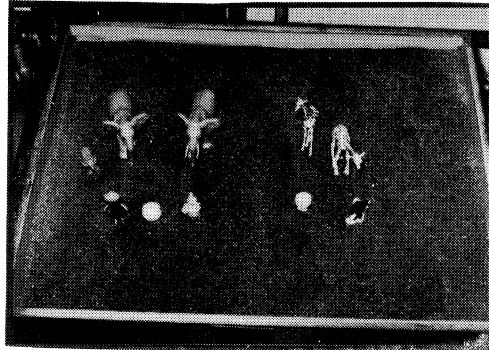


図-11 動物園

〈自由画〉もこれまでの風景構成法の延長のような絵とは一変して「海水浴」であった(図-12)。海辺には4人の少年(小学6年生)がいる。治療者は無意識の深みから出現してきたアニムス像を連想した。箱庭作品も描画も一致して内界との接触を表わしているように思われた。〈相互スクリブル〉では、静枝が「空高く飛んでいる赤と黄色の2つの風船」を投影し、治療者は「長い髪のお姉さん」であった。

第16回面接の〈箱庭〉は、彼女の説明によると《女兒とミッキーマウスが子犬と遊んでいる》であった。〈自由画〉には、小学校5年と6年の2人の少女が示されるが、雨あがり水溜りが描かれている。〈相互スクリブル〉では、静枝が「ハサミ」、治療者は「ムーミン」であった。母親の報告によると、静枝は家庭では以前よりも喋るようになったという。また、これまで父親に対して怖いという気持が強く近づかなかったのに、最近父親に握手を求めたりすることもあった由。

静枝のそうした変化は第17回面接のイメージ表現にも示された。この回の

〈箱庭〉では、家の前に女兒とミッキーマウス、犬を置き、それらより少し下方に右手に鞆をもち左手を挙げている男性を置く。彼女の説明は《お父さんが帰ってきた》であった。治療者は、静枝の父親像が復活、変容しつつあることを感じて、感動した。〈自由画〉では、ゴム跳びやボール遊びをする5人の少女（小学4年位）を描く。〈相互スクリブル〉でのイメージは、静枝が「鍋つかみ」で治療者は「サメ」であった。

第18回面接の〈箱庭〉は「商店街に買物に行っているお母さんと女の子」で、初めて人間の親子が登場するが、今回もその近くにミッキーマウスと仔犬がいる。〈自由画〉は、「鳥が逃げたので捜している2人の姉妹」であった。〈相互スクリブル〉では、彼女が「アイロン」、治療者は「カンムリ鶴」であった。第16回から、ハサミ、鍋つかみ、アイロンなどのイメージが続くので、治療者は静枝が家庭で母親の手伝いなどでもし始めたのだろうかと思像した。

第19回面接の〈箱庭〉では、ミッキーマウスと2人の女兒がシーソーなどで遊んでいる。また、〈自由画〉にはバトミントンをしている2人の少女が描かれる。

第20回面接の〈箱庭〉は、《2人の女の子とお母さんがレストランでジュースを飲んでいる》との説明であった。また、〈自由画〉は「野原で寝ている姉妹」。〈相互スクリブル〉では、第1回目静枝が「赤い手袋」で、治療者は「黄色い蝶」を投影した。2回目は、彼女が「黄色い花瓶」を投影し、治療者は「球を操っているオットセイ」であった。父母の報告によると、静枝は少し前から自発的に母親の台所の手伝いをしたり料理をしたがったりするという。また、父親は娘が自分に甘えてくることが嬉しいと語る。なお、第20回の翌日、父母、学校長、治療者の間の意見交換を経て、静枝の2年生への進級が決まった。

第21回面接では、〈箱庭〉で「母親と女の子が旅行に出かけるので、見送っている父親と子供」を作る。第18回、20回面接では、母親像が小さな人形で表わされていたが、今回は大きな人形を用いている。〈自由画〉では、や

はり2人の少女が描かれ、《友達が帰るので送っている》との説明であった。〈相互スクリブル〉では、第1回目静枝は「赤い手袋をした雪だるま」で、治療者は「ぬいぐるみの犬」。2回目は彼女が「おにぎり」であり、治療者は「だるま」を投影した。

第22回面接の〈箱庭〉でも第18回と同様の買物をしている母子2人が表現されるが、今回使用された人形はすべてプラスチック盤を人の形に打ち抜いて作った抽象的人間である。〈自由画〉は「縄跳びをしている2人の少女」であった。〈相互スクリブル〉での静枝のイメージは「卵」であり、治療者は「サンタクロースと話をしている男の子」であった。

そして、第23回面接は2年生の始業式の日の夕方に行われた。その朝静枝は登校し、それ以後も休まず登校を続ける。この回の〈箱庭〉は、《お父さんが庭掃除している》とのことで、初めて働いている父親像が登場する。側

にはミッキーマウスがいる。

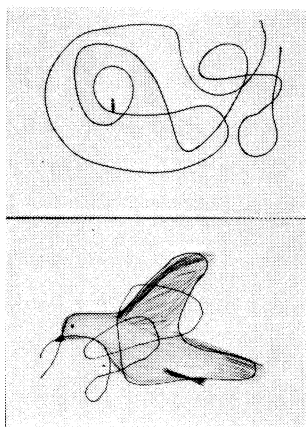


図-13 かまくらの中のろうそく/  
飛んでいる鳩

〈自由画〉には、買物から帰ってきた少女（小6）と縄跳びしている少女（小4）の2人が描かれる。〈相互スクリブル〉では、第1回目静枝は「かまくらの中に点っているろうそく」を投影し、治療者は「飛んでいる鳩」であった（図-13）。何かの誕生を予示するとも思われた前回の「卵」のイメージから発展して、今灯火が点ったという連想を治療者は抱いた。2回目は、彼女が「水溜り」、治療者は「平安時代の髪の長い女性」。

### 第3期（第24回面接～第37回面接 約2カ月半）

この時期になると、静枝は登校を続けると共に少しずつ主体的な動きを示すようになり、また女性性を育んでいく。



第24回面接の〈箱庭〉は「公園で遊んでいる兄弟」で、ミッキーマウスと抽象的人間像との2つを置く。今回は使用領域が上方へも広がる。〈自由画〉では犬と散歩している少女が1人描かれるが、またもや樹木で「茶色の冠部、緑色の幹」の反転現象が見られ、何らかの変化が生じてくることも予想された。〈相互スクリブル〉では、第1回目静枝が「ペロペロキャンデー」で、治療者は「嘴の大きい鳥」。2回目は、彼女が「りんご」を投影し、治療者は「白鳥」であった。

続く第25回面接では、まず〈箱庭〉で「公園でままごととしている姉妹とその友だち」を作る。使用領域が上方に伸び、ほとんど上辺にまで達している。

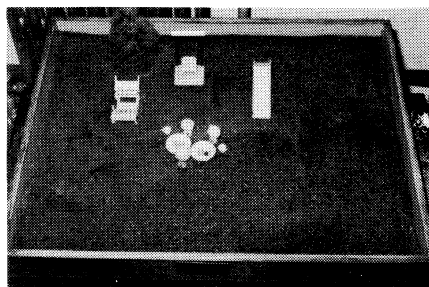
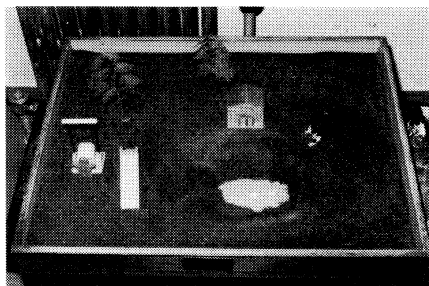


図-14 (A) 公園で遊んでいる兄弟/  
(B) 公園でままごとをしている女児

前回の作品で左下に置かれていたブランコと滑り台が今回は右上に置かれ、箱庭において反転現象が生じている(図-14A, B)。そして、〈自由画〉では一転して「運動靴」(図-15)が描かれる。人物像に欠けていた足(靴)の部分だけが描かれたのであろうか。〈相互スクリブル〉では、第1回目静枝は「ブラウスの襟」、治療者は「サッカーボールを蹴る少年」であった。2回目彼女は「魚」を投影する。それは鋭い歯をもっており攻撃的な印象を受けるものであった。治療者は「蝸牛」を投影した。

母親の報告では、この頃には静枝は元気に登校し帰宅してからも疲れた様

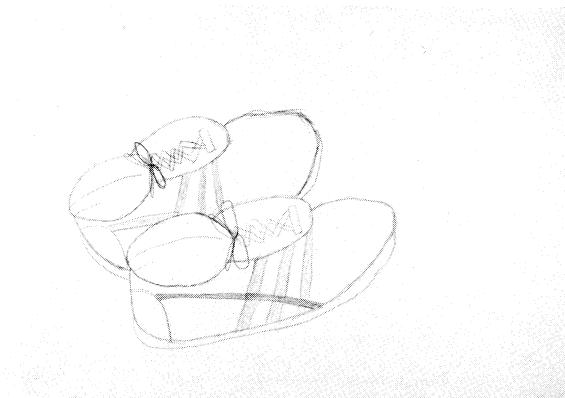


図-15

運 動 靴

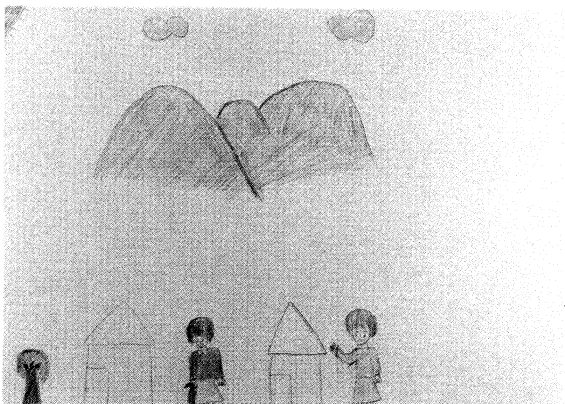


図-16

山の間から突き  
出てきた子ども  
の山



図-17

両側の山をし  
のいで屹立す  
る山

図-18  
風景構成法 (3)

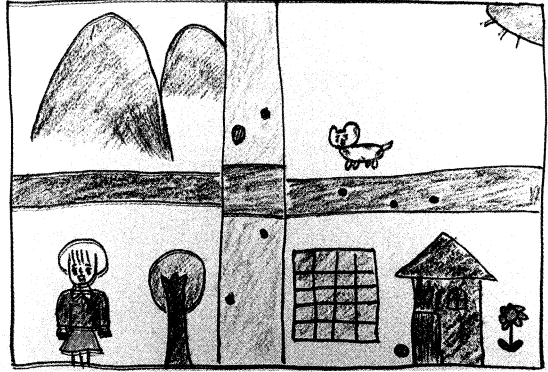


図-19  
ボール遊びを  
している



図-20  
学校のグラウン  
ドで遊んでいる。



子は認められない。家庭ではよく話し、冗談を言うようにもなったという。また、自分で「手さげ袋」を作ったり裁縫をしたがったりするなど、自発的に何かをしようという意欲が出てきている感じで、父母は驚いている由。

第26回面接の〈箱庭〉は《雪除けしている》との説明で、男性がスコップで除雪作業をしており、その側に2人の女兒がいる。〈自由画〉は、「友達が帰るので見送っている」で以前にも示されたテーマであるが、注目されたのは2つの山の間から突き出てきた第三の山の存在であった（図-16）。治療者が「子どもの山が生まれてきたようね」と言うと、静枝はうなづく。〈相互スクリブル〉では、1回目静枝は「かまぼこ」で、治療者は「赤い女物のブーツ」であった。かまぼこについての模様は奇しくも子宮を連想させる形状を示していた。2回目、彼女は「髪飾り」、治療者は「スプーン」を投影した。静枝は前回に続いて女性性を象徴するイメージを表現するが、これは現実水準において手さげ袋を作る行動と軌を一にしている。

第27回面接の〈箱庭〉は「鬼ごっこ」で、女兒が鬼になりミッキーマウスとDonald Duckを追いかけている。前回の箱庭作品で使用領域の右上の方にあった商店街が今回は反転して左下に置かれている。そして、反転現象は〈自由画〉「ボール投げをしている2人の少女」においても、樹冠部と幹の色の逆転という形で生じている。〈相互スクリブル〉では、第1回目静枝が「赤い傘」、治療者は「優しい女の人」。第2回目は、彼女が「米粒」を投影し、治療者は「百合の花」であった。

第28回面接において作った〈箱庭〉は「公園で遊んでいる子ども」。ミッキーマウスと4人の子どもがいるが、4人共抽象的人間像である。〈自由画〉は「犬を1匹ずつつれて散歩している2人の少女」。また、〈相互スクリブル〉では、静枝が「しゃもじ」を投影し、治療者は「水の中から頭を出したイルカ」であった。続く第29回面接では、〈箱庭〉において「おつかいに行っている母親と子ども」。〈自由画〉では「ボール投げしている少女」と以前にもあったテーマの表現である。

しかし、第30回面接になると、大きな変化が生じる。まず、〈箱庭〉では

「動物園」が示される。中央に池が作られ、その中には3羽のフラミンゴと2頭の子カバがおり、池の左側に象の親子がいる。2匹のミッキーマウスと3人の女兒がそれらを見ている。〈自由画〉「ゴム跳びしている」(図-17)では、第26回の絵が発展した印象で2つの山の間にそれらをしのぐ高さの山が屹立している。また、人と木も3つずつ描かれており、それらにおいても真中のものがいずれも高くなっている。〈相互スクリブル〉でのイメージは、第1回目彼女が「芽が出たじゃがいも」で、治療者は「青いブーツ」であった。第2回目は彼女が「栗の実」を投影し、治療者は「赤ヘルの外人選手」であった。

この頃の静枝は朝機嫌よく起床し元気に登校している。家庭では以前に増して父親に甘え、身体接触を求める。母親は静枝が女らしくなってきたと言う。

第31回面接の〈箱庭〉は「公園」で、5人の子どもが遊んでいるが、そのうちの3人は抽象的人間像である。また、久しぶりに試みた〈相互粘土〉では、静枝が「芋とわかめの味噌汁」で、治療者は「きつつき」であった。

第32回面接においても前回と類似のテーマの箱庭作品が主に抽象的人間を用いて示される。〈自由画〉では、「仔犬と遊んでいる少女」であり、特に変化は見られない。〈相互スクリブル〉におけるイメージは、静枝が「スプーン」で、治療者は「ワニのおばさん」であった。続く第33回には、〈箱庭〉で「犬と遊んでいる2人の幼児」。〈風景構成法〉を指示すると、付加項目として橋の左側に道を描く(図-18)。まさに、「道を通った」のであろう。この回、静枝と話し合い諒解が得られたので、面接の頻度を次回から週1回のペースに変更した。

第34回面接の〈箱庭〉「公園で遊んでいる」では、抽象的人間で表わされた4人の子どもが、シーソー、ブランコなどで遊んでいるが、使用領域の右端にあるベンチに赤いドレスを着た少女が座わっているのが注目された。つぎの第35回面接には「3人の女兒が公園でままごとしている」という箱庭を作る。

第36回面接に来談した際、静枝は髪をカットして中学生らしく変貌してい

る。この回の〈箱庭〉でまたもや反転が認められた。作品は《家の近くでままごとをしている》とのことであるが、第34回の箱庭作品で使用領域の右端にあった赤いドレスの少女が反転して左辺側に置かれている。また、ままごとの御馳走の中にある赤い果実が目立っている。〈相互スクリブル〉では、静枝は「人参」を投影する。治療者は「中学生の男子」であった。

第37回面接。この日の朝父親から電話があり、静枝が2、3日前から勉強を教えてくれる人が欲しいと言い出したので家庭教師を頼むことにしたと聞く。この回の〈箱庭〉は《友だちと遊んでいる》との説明で、女兒と擬人化したクマが遊んでいる。〈自由画〉は「おつかいに行く少女」であるが、今回初めて少女に「足」がつく。静枝は現実水準においても家庭教師を希望するなど主体的な動きを示しており、まさに彼女が自分の足で歩み出したのだという印象を治療者は抱いた。この回、面接の頻度を減らすことを話題にすると、彼女は2週間に1回のペースを希望する。

#### 第4期 (第38回面接～第57回面接 約11カ月)

この時期には社会的関係、集団への適応に向かう動きが少しずつ広がっていき、特定の友人との交流が密になり、また異性への関心も芽ばえてくる。

第38回面接から第44回面接までの〈箱庭〉では毎回《ままごとをしている》テーマが示される。このうち、第39、42、43、44回面接ではいずれも人間は登場せず2匹のミッキーマウス、ミッキーマウスとドナルドダック、あるいはドナルドダックとプルート（犬）というように、いわばファンタジーランドの住人だけが遊んでいる。また、どの回にもままごとのご馳走の中に赤い果実が入っているが、殊に第43、44回面接には赤い容器も用いられているのが注目された。この時期の自由画は《おつかいに行っている》、《縄跳びしている》、《テニスをしている》、《バレーボールをしている》などのテーマで描かれるが、小学5、6年生の少女が常に2人登場する基本的には同じような作品である。図-19は、第39回面接での〈自由画〉「ボール遊びをしている」である。左側の木の枝がかなり分化しりんごの実がなっていること、窓にカーテンがついていることなどが注目される。この時期の〈相互スクリ

ブル)でのイメージ表現では〈箱庭〉、〈自由画〉におけるよりも変化が認められる。第38回では〈静枝：小指↔治療者：ウルトラマン〉で、以下第39回〈池の中の7匹のオタマジャクシ↔コブラ〉、第40回〈魚↔お伽話のお爺さん〉、〈赤い靴下↔体操する男性〉、第41回〈枝豆↔白鳥の子〉、第42回〈海の深いところにいる魚↔飛んでいる青い鳥〉、第44回〈池の中の3匹の赤い金魚↔お喋りする2人の少女〉であった。静枝が投影したイメージには水の中にいる動物や赤い色のものが多い。

なお、第42回面接から第44回面接の間に行われた母親面接ではつぎのようなことが報告される。静枝はこの頃衣服に関してお洒落になり、近くに住むクラスメートの女子とよく行き来している。また、クラスに静枝と雰囲気似たおとなしい男子生徒がおり、彼女はその人と友だちになりたいけれど女の子の方から声をかけても失礼ではないだろうかと母親に相談してきた。そして、父母に支持されて間もなくその男子生徒に手紙を出した。父親も母親も静枝の変化が著しいので驚いていると語る。

第45回面接から第50回面接にかけての箱庭作品のテーマはいずれも《ままごとしていた子どもたち》であるが、登場するものはほとんどが現実の人間像である。また、第46回面接の箱庭作品には、遊んでいる2人の娘の側に《ベッドに寝ている赤ん坊》が登場し、同じテーマが第49、50回面接の作品にも見られる。これは、静枝の内界で新たに成長しつつあるものの表現であるように思われた。また、第50回面接以後では使用領域が砂箱全体に広がるが、第50回の箱庭作品には左辺側に初めて学校が置かれる。現実水準では、静枝は第50回頃から面接場面においてある程度自発的で自然な会話をするようになる。

この時期の〈自由画〉のテーマは基本的にはそれ以前のものほとんど変わっていないが、箱庭作品で赤ん坊が登場した第46回面接では絵の中の人物の年齢が静枝の現実の年齢と同じになっている。〈相互スクリブル〉におけるイメージは、第45回〈静枝：赤い金魚↔治療者：仔熊〉、第46回〈のり巻き↔コリー犬〉、第47回〈生えている椎茸↔踊っている女性〉、第48回〈西

洋梨↔ネッシー)、〈水溜り↔OKのサインを示す指〉、第49回〈波↔少年〉、第50回〈衣紋掛け↔受けた球を投げ返している捕手〉、〈貝殻↔女の子〉であった。この頃のクライアントに対する治療者のかかわり方は、投球練習をするピッチャーの球を受け一球一球手応えを確かめて「よし！良い球」と声をかけ返球するキャッチャーのごとき心境で、彼女の成長の歩みを見守りつき合っていこうという感じであった。

第51回、52回面接の箱庭作品のテーマは、《ままごとをしている》、《犬と遊んでいる》で、それ以前にも見られたものであった。しかし、第53回面接の〈箱庭〉では変化を示し、《2人のミッキーマウスと女兒が池に蛙をつかまえてきている》となり、左上に学校が置かれている。第54回面接になると、その学校が上辺中央よりも右の方に置かれ、それが主舞台となり《学校で遊んでいる》。ミッキーマウスとブルートを含む4人の小学生が遊んでいる。この時期の〈自由画〉はほとんど同じようなテーマであるが、描かれる樹木の幹が非常に太くなり根元も広くてしっかりと大地に根をおろしている印象である。また、家よりも背の高い木が描かれる場合もあった。〈相互スクリブル〉においては、第51回〈静枝：苺↔治療者：スケートをする人〉、〈じゃがいも↔英国の近衛兵〉、第52回〈なすび↔あひる〉、〈黄色いりボン↔母親の肩を叩く少女〉、第53回〈きゅうり↔インディアンの娘〉、〈なすび↔膨らむ餅〉、第54回〈バナナ↔蟹〉で、静枝は毎回のように果物や野菜の実を投影する。なお、第54回面接の際、話し合いの結果次回から面接を3週に1回のペースで行うことに変更した。

第55回面接は、静枝が順調に3年生に進級した4月の下旬に行われた。その頃彼女は鮮やかな赤い色の衣服を好んで着ていたが、この回にも赤いセーターにピンクのスカートという装いで現われた。前年の夏頃から箱庭やスクリブルのイメージの中に赤いものがしばしば登場していたが、この時点になり彼女が身をもって赤色を表現するようになったのであり、そこに彼女の感情表現の復活がより明確に示されているという印象を抱いた。この回、静枝は箱庭、描画などの非言語的表現には向わずに話し合いを希望する。治療者



が新しいクラスのことを聞くと、話をする相手もおり楽しいと語る。

第56回面接の〈箱庭〉は「学校のグラウンドで遊んでいる」(図—20)で、ミッキーマウスと4人の子どもが遊んでおり、最も現実的な領域である右上に学校が置かれている。静枝が終結希望を口にしてしていると父親から聞いていたので、終結のことを話題にし彼女の気持を聞くと、あと1回来て終りにしたいと述べる。

第57回面接に、静枝は明るい表情で来室し治療者の目をしっかりと見て話す。治療者が「もう静枝さんは自分の足で歩いてやっていけると思う」と言うと、彼女もうなづく。

治療終結から数年後の現在、静枝は社会人として元気に生活している。

## Ⅳ 考 察

本事例に関して考察したい問題はいくつもあるが、ここでは治療過程におけるイメージ表現にしばって検討する。

### 1. 治療過程におけるイメージの変遷

自我の健全な発達にとって必要な親に甘え、世話される経験を幼児期において十分にもつことができず、制約的で厳しい養育を受けた静枝は、年齢相応の自立性、社会性を育むことができなかった。彼女は言われたことを言われたとおりに守って動くことはできても、自分の気持や考えに根ざして主体的に選択、判断したり自分の問題を自主的に処理することが極めてできにくい状態にあった。

そうした主体性に乏しいあり方は、治療初期に描かれたバウムテスト、風景構成法、統合的HTPテストなどにも端的に表われている。幹の上方が開き分枝のない樹木、窓がない家は、彼女が外界との交流に関して極めて受動的、消極的であり他者とのコミュニケーションがとれないことを示している。記号的線描画で表わされた人物像は、静枝が自分について懐疑的で不安感を持ち、自己概念を確立していないことを示唆している<sup>8)</sup>。筆者の限られた臨床経験からの印象をあえて述べると、このような記号的線描画の人物しか描け

ないクライエントには、環境への順応姿勢が過剰で内的規制棒が極めて強いために自分の内的世界、本質的な部分を圧殺し自分をもたない人が多い。換言すれば、外界に合わせることに傾き過ぎて、アニマ（アニムス）が圧殺されているような状態にある人が多いということであるが、実際彼（彼女）らの夢ではしばしばミイラのようになっていたり死んでいたりするアニマ（アニムス）像が登場する。そういうことから、当然、彼（彼女）らは外界に対して主体的に振舞えず、対人関係での適応にも困難をきたしやすい。治療開始当初の静枝も、まさに〈こころ（内的世界）〉も〈肉体性〉ももたない棒だけの存在としてあったと言えよう。

そうした静枝とかかわっていくにあたって、治療者は当初は課題画や彼女が慣れているオセロゲームなどを媒介として構造を与えて守りながら彼女との歩みを始めていこうと考えた。

治療者との交流を重ねていくうちに、第6回面接の風景構成法では家に窓がつく。外界との交流の通路が少し開かれた印象である。実際、この頃には静枝は面接に来ることについて積極的になっている。そして、第7回面接の箱庭表現では、治療者像を思わせる男性と少女が登場し、《鳥に餌を与えている》テーマが示される。これにより、治療者との間に一応の安定した関係が形成されつつあることが窺える。同時に、その後の展開の可能性についての期待ももたれた。なお、治療関係がある程度成立しかけたこの辺りから、相互スクリブルや相互粘土造形などを介して治療者とクライエントが相互にイメージを表現し合いエネルギーを交換し合う試みを治療的交流の主軸として取り入れている。

第2期（第8回～第23回）に入ると徐々に治療的退行が進展していく。箱庭表現における流れをみると、まず第8回で小学4年生の男女児と共に幼稚園児が登場するが、第11回目までの間に登場人物の年齢が3才まで下がり、口愛的なテーマも表現される。

他方、自由画においては、第9回に樹木の冠部と幹の色が逆転する。この反転現象は Jung がいうところの〈エナンティオドロミア〉(enantiodromia、

相互反転) であると考えられる。ここでの反転は、意識の方に向いていた心的エネルギーの流れが無意識の方向に反転すること、すなわち退行傾向を示唆している。第10回の自由画では、初めて人物像に目鼻がつくが、《そりで左下へ滑べり下りる兄弟》のテーマが示される。加えて、スクリブルにおいては地中への下降を連想させる《落し穴》が表現されており、退行が一層深まることが予想される。そして、第11回面接の自由画に至ると、冠部が真黒な樹木という衝撃的なイメージが表現される。黒は最も暗い色であり、一般に限界、別離、分解を象徴し、生の否定という意味をもつといわれる<sup>2)</sup>。心理的には深い抑うつ、退行、無などの経験を表わすこともある。そこにはまた、変化と新しい始まりの可能性をも内包していると考えられる。静枝の場合、この時点において心的エネルギーの退行が極に達し、植物的な段階で象徴的な死の体験が生じているものと考えられる。続く第12回には初めて肉体を備えた少女像が登場する。それ以前の描画における人物像はすべて記号的線描画であり、しかも大人の男(第3回)、男の子(第6回)、兄弟(第10回)というように男性像であったが、第11回における象徴的な死の体験を経て肉体をもつ少女が新生した印象である。すなわち、ここにおいて〈死と再生〉のプロセスが生じていることが認められる。この変化と関連してか、第12回以降の箱庭作品では登場人物の年齢が上昇し始める。

自由画に登場する少女像は、その後、第13回《双生児の少女》、第14回《3人の少女》と発展する。そして、第15回には《海水浴の4人の少年》が表現される。あたかも海(無意識の深み)から出現してきたかのような印象の少年は静枝のアニムス像であろう。それは彼女の内的世界(こころ、魂)のイメージであると同時に彼女の心の中の男性的部分を表わすものである。また、この少年の像は、治療初期に棒状の存在であったアニムスが死と再生のプロセスを経て変容したことをも示している。Kallfは「“4”という数字は全体性という意味において中心化がなされた時に表われてくる」と述べている<sup>3)</sup>が、「4」のテーマを含むこの絵はマンダラであると解される。ここにおいて、自我と深層とのつながりを回復する体験が生じており、彼女の心の内部で自我と無意識

とのより高次の統合へ向かう動きが生じていることが窺われる。「心の全体性」の象徴表現と軌を一にして、この回の箱庭作品のテーマは《動物園》であり、自己の本能的部分に触れるイメージ表現がなされている。そして、この頃から静枝は家族との間でよく話をするようになっていく。

マンダラ表現を境にして、その後第23回面接頃までの箱庭作品においては、《旅行から帰ってきた父親》、《庭掃除している父親》など彼女の父親像の復活、変容を示唆するイメージ表現がなされる。それと共に、《母親とジュースを飲んでいる子ども》、《母親と旅行に行く女の子》などの退行した母子関係、母親イメージの回復を示唆するテーマが繰り返される。実際に、この時期静枝はそれまでとうって変わって父親に接近し始め甘えを表現するようになる。母親にも甘えたり一緒に台所仕事をしたりするようになっていく。こうした甘え直し体験は、子どもの自我が自立的な方向に成長していくためには必須のものである。

そして、第22回面接のスクリブルでは《卵》が表現される。彼女の心の中で何かが生まれてくることが予感されたが、続く第23回には《かまくらの中に赤い灯火が点る》。これは卵の孵化に匹敵するイメージである。このイメージを表現したその日から静枝は登校し始める。

卵の孵化によってつぎの展開過程の幕開きが告げられるが、第3期（第24回～第37回）に入ると、まず第24回の自由画で樹冠と幹の色の反転が生じ、続く第25回の箱庭表現でも反転現象がみられる。そして、この回の自由画には《運動靴》が表現される。それまでの人物像に常に欠けていた足（靴）の部分が予示された印象である。さらに、第26回になると、自由画において2つの山の間から第3の山が生まれ出てくる。この山は第30回に至ると両側の山をしのいでそそり立つまでに成長する。その間、第27回の箱庭、自由画において反転現象が生じ、第29回の箱庭では《おつかいに行っている母親と子ども》という退行した母子関係のテーマがもう一度表現される。現実水準でも、静枝はこの頃父母との身体接触を求める傾向を強めている。親との間での身体接触を通じて基本的安全感を確認したところで第30回の表現が可能に

なったのであろう。

ここに出現した《突出し成長する男根的な山》は、西村(1982)がいう「土的男根象徴」<sup>4)</sup>に匹敵するものと思われる。土的男根象徴は男根的な力強い自我、自我の主張性の象徴であり、自我の独立の可能性を表わすものである。静枝の場合、この男根的な山が誕生し成長する過程で、第30回の箱庭作品《動物園》によって示唆されるように、自我が本能的エネルギー、内的活力とのつながりをそれ以前よりも取り戻してより主体的な動きを示せる方向に歩み出して行ったのである。そして、第37回に至り、自由画で《足(靴)の獲得》が表現される。靴は自分の足で歩くための手段であり、現実に対する態度を象徴するともいわれる<sup>3)</sup>。実際、我々はある程度自己を主張する力をもたないと、現実に対する自分の態度、立場をとることができない。まさに、この絵は、彼女が自分の足を大地につけ自らのものをひき受けて歩けるようになったことを象徴的に示しているのである。この頃、彼女は自分の意思を表明して家庭教師を得ている。また、母親の誕生日に、彼女ひとりで買物に出かけプレゼントを見たてて母に贈っている。以前の静枝は自分の身の回り品などをかうために親と出かけても容易に決められず何度も足を運ばねばならないような状態にあったので、その変化は母親を大いに驚かせ喜ばせたのであった。

他方、第24回以後のスクリブルにおける表現に目を向けると、《ブラウスの襟》、《髪飾り》、《赤い傘》、《しゃもじ》など、女性的なペルソナあるいは女性性を象徴するイメージが集中的に示されている（この辺りでは、治療者の方も同様のイメージを表現して交流している）。これに類したイメージは第2期の後半にも生じていたが、この時期に至り一層顕著となる。西村(1982)は「土的男根象徴の表現と同時かあるいはその後に性役割の統合のテーマが多い」と述べているが、静枝の場合にも、母親に甘え、世話され、あるいは母親と一緒に家事をするといった母体験を基盤にして、女性性が育まれていくプロセスが生じていることが窺える。現実水準でも、静枝は《手さげ袋》を自分で縫ったり洋裁をしたりするなどの行動をみせている。手さげ袋

を作る行為は、女性性の発展にとって大切な〈内空間〉を育むことと関連して意義深いものである<sup>8)</sup>。彼女がこの時期に女の子らしく変貌したことは父母・近所の人がはっきりと認めているところであった。第36回面接に認められた《ヘア・カット》もそうした内的変化を端的に示すものであると思われる。

登校し始めた第3期以降の箱庭作品には仲間関係への適応に向かう歩み、社会的関係が少しずつ広がっていく過程が一貫して表現されている。すなわち、第24回の作品は《公園で遊んでいる兄弟》であるが、第25回には《ままごとをしている姉妹とその友だち》となり人間関係の範囲が少し広がる。さらに、第28、31、32、34回の作品になると、3人～5人の子どもが公園で遊んでいるが、どの場合にもその中に抽象的人間像が混じっている。抽象的人間像の存在は対人関係における不安、緊張、とけこめなさなどを反映しているのかもしれない。しかし、第35、36、38回に至ると、抽象的人間像は姿を消し、ままごとをしている子どもはすべて具体的人間像となっている。

第4期に入った第39、42、43、44回の箱庭表現ではそれまでと異なった様相を呈する。ままごとをしているものがすべてミッキーマウスやドナルドダックなどのキャラクターとなる。これらの非現実的な像は前述の抽象的人間像とは意味を異にするとと思われる。この4つの箱庭作品は外界との関係、対人関係の側面を表現しているというよりも、次項で論ずるような内的世界とのかかわりを表わしているのではなかろうか。

第45回以後の箱庭では、現実的人間像が主に登場する表現に戻るが、第46、49、50回には彼女の心の中で新たに発展しつつあるものを示唆するかのようには《赤ん坊》が登場する。また、第50回の作品には左辺に初めて学校が置かれる。まだ周辺的な場所にはあるが、彼女の心の中で〈学校〉がある位置を占め始めたという印象である。この学校は、第54、56回になると、最も現実的な領域である右上に移動し、《学校で遊んでいる》テーマが登場する。それまで繰り返されていた〈ままごと遊びの段階〉を脱したのである。この頃、現実にも静枝が学校場面において彼女なりに自分の居る場所を獲得しつつあることを治療者も認めていた。第51回以後のスクリブルで繰り返し表現

された果物や野菜の実はそうした収獲物、成果をも意味しているのかもしれない。

静枝からの終結希望に際して、治療者は箱庭作品の学校が小学校である点などにやや気がかりな面も感じていたが、彼女の意欲を尊重したいと思い、その後の成長に期待して終結に同意したのであった。

## 2. ミッキー Maus 像の意味について

ミッキー Maus は静枝の箱庭作品にしばしば登場し重要な役割を果たしているものである。ここでは、ミッキー Maus およびこれと類似の存在である Donald Duck、Pluto などの意味するものについて考えてみたい。

都合48回の箱庭表現のうちミッキー Maus らが登場するものは21回あるが、その登場の仕方を分析するとつぎのような特徴が認められる。

まず、治療過程を4つの時期に分けてみると、これらのキャラクターは内的変容過程が展開し始めた第2期以後に出現している。第2期には7回登場しているが、いずれの場合もミッキー Maus 1匹だけである。それらを見ると、植物段階での死の象徴表現がなされた第11回と第16、19回には〈女兒と一緒に遊ぶ存在〉として、またマンダラ表現が示された第15回には〈ガイド〉のような印象で、さらに父親像の復活、変容を示唆する箱庭表現がなされた第17回、23回と退行した母子関係、母体験のテーマが初めて箱庭に示された第18回には〈立会い人〉あるいは〈共にいる存在〉の印象で現われている。ほとんどが重要なイメージ表現のなされたセッションにおいて登場している。

第3期には5回登場しているが、いずれも重要な表現がなされたセッションにおいてである。まず、自由画で反転現象が生じた第24回にはミッキー Maus が遊んでいる兄弟のうちの兄として登場している。そして、自由画において男根的な山が突出し始めた第26回を過ぎたところからミッキー Maus らが複数で登場する場合も出てくる。すなわち、箱庭と自由画の両方で反転現象がみられた第27回にはミッキー Maus と Donald Duck が、続く第28回にはミッキー Maus 1匹が、いずれも〈一緒に遊ぶ存在〉として登場している。さらに、両側の山をしのいで屹立する男根的な山が描かれた第30回には、2

匹のミッキーマウスが〈ガイド〉あるいは〈立会い人〉の印象で動物園にきている。また、描画の人物像に足（靴）がついた第37回には擬人化されたクマが女兒と一緒に遊んでいる。

第4期においては、ミッキーマウスらは9つの箱庭作品に登場している。このうち、第39回、42、43、44回では、既述のごとく2匹のミッキーマウス、ミッキーマウスとドナルドダック、ドナルドダックとプルートなどだけで遊んでいる。第49、52回には〈女兒と一緒に遊ぶ存在〉としてのミッキーマウスがみられる。さらに、箱庭作品に学校が登場した第53、54、56回には、それぞれ2匹のミッキーマウス、ミッキーマウスとプルート、ミッキーマウス1匹が〈ガイド〉、〈一緒に遊ぶ存在〉として現われている。

周知のように、ミッキーマウスはDisneyが生み出した漫画映画シリーズの主人公の〈ネズミ〉である。ミッキーマウスは子どもたちの人気者であり、子どもの世界を分かってくれる存在である。また、彼は子どもたちをファンタジーランドへ誘う存在でもある。ドナルドダック、プルートも類似のキャラクターである〈アヒル〉と〈犬〉である。ミッキーマウスが果敢な冒険ぶりを示す存在でありながら紳士然とした面をもっているのに対し、ドナルドダックは自分の感情をむき出しにしてヒステリックにわめく賑やかなキャラクターである。プルートはそれよりも少しエネルギーの強い存在といえようか。3者はいずれも男性である。

本例の治療を行っていく過程で、筆者は箱庭作品におけるミッキーマウスについて〈子どもの世界を分かる存在〉、〈ガイド〉、〈共にいる存在〉などのイメージをもち、当初はそれが主に治療者像を表わすものではないかと考えていた。しかし、第3期以降の展開をみていくうちに、ミッキーマウスらがそれ以上の意味をもつ可能性を感じ、彼女の内界に存する何かを表わすものとして受けとる方が良いと考えるようになった。もちろん、治療者像であると同時に内的世界の像でもあるというように客体水準、主体水準の両面からの解釈をしたい場合もある。そして、今のところ、ミッキーマウスらについては、治療者像以外に彼女のアニムス像を表わすものとして考えている。



そういう視点からミッキーマウスらの動きを検討し直してみると、最初にミッキーマウスが出現したのは、記号的線描画で示された人物像から肉体をもった少女像へと変容する転換点となった第11回においてであった。第11回より前の描画における人間像はすべて男性像であるので、ここでの変容過程には棒状の存在であったアニムスの変容するという側面も当然含まれていると考えられる。(事実、その4回後のマンダラ表現の中には肉体をもった少年像が現われている)そして、第11回の箱庭には、静枝の心の中で圧殺されていたアニムスの変容してミッキーマウスの姿をとって登場してきたのであろう。

アニムス像としてのミッキーマウスは、その後の展開過程において、自我と衝動層のものとのつながりをつける働きをしたり(第15回)、父親像の回復、変容や母体験の過程に自我像を表わす女兒と共に参与したりしている。その中でも、筆者が特に印象的に思うのは、第23回に働く父親像が登場した際にその側にいるものがミッキーマウスだけである点である。父親像の変容は娘の心の中の男性像(アニムス)の変容と微妙に関係してくると考えられるからである。

第3期に入り、描画において男根的な山が誕生し自我の主体的な面が育まれていくプロセスが動き出すが、その途上にある第27回からミッキーマウスと共に彼とは性格を異にするキャラクターが出現したり2匹のミッキーマウスが登場したりしている。これは、それまでミッキーマウスで表わされていたものが分化してきたことやアニムスが活性化されてきていることを表わしているのであろう。第27回の箱庭表現のテーマは《鬼ごっこ》で、女兒が鬼になってミッキーマウスとドナルドダックを追いかけているが、これは自我が積極的にアニムス(内なる男性性)とのかかわりを求めるといった意味をもつのかもしれない。アニムスは女の子にとって強さ、活動性、行動力などをもたらすものである。女の子が自立性を増していこうとする時には自分の中にある男性性に出会っていかねばならないのである。静枝が自我の主体性を育てていく上でアニムスとかかわりをもつことは真に大切なことである。

そうした観点からすると、屹立する男根の山が生じた第30回に2匹のミッキーマウスが登場し、人物像に足がついた第37回にミッキーマウス、ドナルドダックなどよりもエネルギーの強いクマが登場し女兒と交流しているのも首肯できることである。

第39、42、43、44回には、ミッキーマウス、ドナルドダックらのキャラクターだけが常に複数で登場している。特に、第43回にはドナルドダックと共に新たにブルートが登場する。人間像が登場しないこれらの箱庭作品は彼女の深層の表現であるのだろう。それらは、この時期に静枝の内面でアニムスが一層活性化されていることを表わしているものと考えられる。なお、この時期のイメージ表現の特徴を検討すると、箱庭、自由画、スクリブルのいずれにおいても赤い色のものが多く表現され（第43回の自由画では赤い鳥が飛んでいる）、感情要素が強まっていることが窺われる。また、スクリブルでは〈海の深い所にいる魚〉(第42回)をはじめ水の中の生物が集中的に表現され無意識とのかかわりが強まっていることが推測される。

この活性化されたアニムスは外界に投影され男子生徒への関心となって生じたものと考えられる。第41回と42回の中に、家庭での語らいの中で、静枝は弟から「お姉ちゃん好きな人いるの?」と問われ、「憧れている人はいるよ」と答えていたという。その直後その男子生徒と友だちになりたいことについて母親に相談しやがて手紙を出している。むろん、彼女のアニムス像の特徴からして、この段階での異性への関心は静枝の言表にもあるように淡い憧れのようなものであると思われる。

以上、箱庭表現におけるミッキーマウス像の意味について検討してきた。

こうしてみると、本例の治療過程ではアニムスの救済、発展のテーマが大きな位置を占めていることが分かる。マンダラ表現において4人の少年像が示された意味もそこにあると思われる。（昭和62年5月20日受理）

稿を終えるにあたって、本事例のスーパーバイズの労をとって下さった京都大学教育学部山中康裕助教授に深く感謝いたします。第37回面接を終えた時点でそれまでの

## 清水 信 介

治療経過について山中助教授にスーパービジョンをお願いし、ご指導をいただきました。そのことを記すと共に、心からお礼申し上げます。

### (註)

- 1) 本論文の要旨の一部は北海道精神神経学会第62回例会(1982年12月)において発表した。
- 2) 本例の生活歴等については秘密保持のため本質を変えない程度に一部フィクション化がなされている。

### 参考文献

- 1) Kalf, D. M. : Sandspiel. (Zürich: Rasher Verlag, 1966) (河合隼雄監修 大原貢・山中康裕共訳: カルフ箱庭療法 誠信書房 東京 1972)
- 2) Lutz, C. : Kinder und Das Böse—Konfrontation und Geborgenheit. (Stuttgart : W. Kohlhammar GmbH, 1980) (野村美紀子訳: 子どもと悪 晶文社 東京 1985)
- 3) Marie-Louise von Franz : Shadow and Evil in Fairy Tales. (Spring Publications 1974) (氏原寛訳: おとぎ話における影 人文書院 京都 1981)
- 4) 西村洲衛男: 箱庭表現とその解釈—幼児の箱庭について 愛知教育大学研究報告 31 (教育科学), 129—147, (1982)
- 5) 清水信介: 前思春期ヒステリー症例の心理治療過程と家族画の変化 室蘭工業大学研究報告(文科編)第35号 149—186 (1985)
- 6) 高橋雅春: 描画テスト入門—HTPテスト—文京書院 東京 (1974)
- 7) 山中康裕: 自己身体験を中心とした対人恐怖症あるいは境界例の精神療法過程と女性の《内空間》の形成についての試論 分裂病の精神病理6, 185—216, 東京大学出版会 東京 (1977)
- 8) 山中康裕: 児童精神療法としての心像分析について 徳田良仁編「芸術療法講座1」 星和書店 東京 (1979)